

理研OB会

会報

創刊号



1号館本館

1975-4

目 次

会長挨拶（朝永振一郎）	1
理事長挨拶（星野敏雄）	1
OB会設立の経過（宮崎友喜雄）	2
懇 親 会	4
在職者座談会「OB会について」	9
便 り	16
事務局より	17
理研「所報」より	19
編集後記	19

会 長 挨 拶

朝 永 振一郎

私は、実は大学を定年で辞めた時、“長”の字のつくものは一さい断わろうという堅い決心をしました。この間、ある大学から、学長をやらないかと言われましたが、いやだとお断わりしました。

しかし、どうも理研に御世話になり、居心地が良かった記憶がありましたので、ここなら会長をやっても居心地が悪くないと感じまして、さっそく勲章をいただきました。皆様と楽しい会にしたいと思います。こゝでOBと言うのでは男性だけになってしまいます。女性の方も何人か居られますので「OBは何の略か」と聞かれた時Old Beauty なら女

性は文句ないでしょうが、男性がBeautyと言われたなら、おしりがむずむずするでしょう。昔の理研に居た方は、みんな何時までたっても大人になりきれない……と言っては失礼ですが……気の若い方々が多いのでOld Baby としたら良いと思います。私に聞かれたらOld Baby としたいと思います。各人が聞かれたら各人御自由にOとBに適当な字をあてはめ、各人各様に説明されるのが、いかにも理化学研究所らしい個人の自由を尊重して、おのおのの創意にまかせる理研の精神であります。副会長は今までの経過からして、宮崎さんをお願い致します。

理 事 長 挨 拶

星 野 敏 雄

本日はご多用のところ理研OB会にご臨席をお願いありがとうございました。先刻別室において、設立総会が開かれまして、めでたく誕生のうぶ声をあげました。会長は理研の大先輩である朝永振一郎先生にお願いすることになり、名実ともに日本一の会ができました。

理研も大正6年3月に東京の駒込に設立されて以来、間もなく60才になります。この

間にあって理研は数多くの世界的業績をあげ、科学史上にかがやかしい足跡を残してきました。これもひとえに、かって理研に在籍された皆様がたの涙ぐましい御努力があったからだと思います。

本日皆様においでいただきました研究所は約224,000 m²の土地に昭和38年8月より順次各施設の建設を進めまして、現在ではほ

とんど工事が完了しております。

研究所の年間の予算も40億円にのぼり職員も研究、工作、事務の各部門あわせて618名おります。研究室は原子核、物性物理、応用物理、基礎工学、無機化学、有機化学、生物化学、農薬の各分野にわたり48あり、活潑に研究活動を行っており、着々とすぐれた研究成果をあげておりますので、ご安心いた

だきたいと思います。

さて、OB会発足を機会に今後ともお気軽に研究所に顔をおみせいただき、OBの方々とばかりでなく、現役の職員との親睦をもちかければ望外の喜びです。

簡単ですが理研OB会の発展については、研究所の発展を祈って私の挨拶にかえさせていただきます。

理研OB会設立の経過

宮崎 友喜雄

理研OB会第一回総会にあたり、設立準備世話人を代表して、OB会設立の経過について申し上げる機会を与えられ、大変光栄に存じます。財団法人理化学研究所が設立され、株式会社科学研究所を経て、現在の理化学研究所に至るまで、60年に近い年月が経過しておりますが、この長い歴史上、今日は誠に記念すべき日であり、今日のよき日にかくも多数の方々の御出席を得ましたことを深く感謝し、心から歓迎申上げる次第であります。60年に近い長い年月の間に、理研に関係された方々は非常に多いのでありますが、それらの方々と理研をつなぐ正式な絆が無く、個人的にあるいは研究室や部を通じてつながりをもっておられたにすぎませんでした。今まで何回となく理研OB会というようなものをつくらうという動きはありましたが、実現に至り



ませんでした。たまたま、昭和48年6月ある機会があって、駒込の43号館にOB、現役合わせて40人近くの方々が集まりました。この席上、理研OB会を結成しようという発言があり、当時理研の役員になったばかりの私に、その音頭をとれということになり、うかうかと御引き受けしてしまった次第でした。この会に出席された40数名の方々の中から、

10数名の世話人をお願いし、OB会を作る為の具体的な相談を始めました。まづOB会名簿作成のための調査を始めましたが、資料が乏しく多くの困難がありました。

名簿の原案を作り完全を期するため調査カードを発送し、その結果を参考にして名簿を作成しました。これは発送した730枚のカードに対する、400枚の返信についてまとめ上げたもので、極めて不備なものであり、多くの不満や訂正の連絡を頂きましたのでこれを逐次追加してまいりました。昭和49年9月14日理研OB会設立準備世話人会を開き、第一回総会を11月16日とすること、OB会の規約や運営について最終的な相談を行ない、850枚の案内状を発送いたしました。そして今日の第一回総会を開催する運びとなりました。この間の世話人会の運営は、有志の寄附と理研からの財政的援助によって行ないました。今日この総会を開くに当って実に数多くの方々の御協力があつたことを世話人の一人として心から感謝いたします。

OB会の運営について

- 年会費1000円について賛否を問い、可決された。
- 名簿について

財団法人 理化学研究所

株式会社 科学研究所

特殊法人 理化学研究所

出身者名簿

とし、OB会会員となられた方に、○印をつけることが可決された。

- 総会について

年一回、総会を開催することか可決された。

- OB会のあり方について

出席の方々に数名の者が直接御意見をうかがうことにしておりますのでその節はよろしくお願いいたします。

- 研究所内にOBの方々の為の室を設けることを予定しております。



＝ 懇 親 会 ＝

去る11月16日のOB会第一回総会終了後、2時過ぎより会場を食堂に移して、懇親会がもたれました。会場へ到るまでの長い廊下で約70名の現役の方々が待ちかまえて、早くも話が弾み、駒込時代の食堂に比べ雲泥の差といおうか、ホテルのホールの様な明るい会場で、約250名からの方々がビール、



酒、オードブル、などを囲んで楽しく旧友同志、先輩、後輩入り乱れて、話に華が咲きました。当日は、多くの女性会員の参加があり、御子様連れで楽しんでおられるほほえましい情景もありました。予定した2時間もアッと云う間に過ぎて、四時半頃おひらきということになりましたが、終ってからも想い想いに各研究室に引きあげて旧交を温める喚声が、夜分遅くまで所内にこだましていました。この楽しい雰囲気、私達が拙い乍ら、OBの方々にインタビューをして参会者の感想を集めようと計画し、当初は、職場別、各年代にわたって幅広く御聞きする予定でしたが、あまりの盛会に予定したそのごく一部しか果せませんでした。

インタビュー

山田氏（工作）

OB会に期待しています。でも来て見ると偉い人が多くて、我々下っぱが来る場所ではないみたいです。理研そのものは大好きですので、私自身は年中来ています。今の理研の人ともなじみたいと思ってるんです。私みたいなずうずうしいのはどこへでも出入りしますが、皆が来易いような会になってほしいです。

小林正和氏（宮田研究室）

私の居たのは科研時代で、玉木委員長を頭

として、組合と仁科先生とが一つの会場で質疑応答をやるという雰囲気の中に私も入って、若気の至りですが組合で随分やったものです。

今思うに戦後の混乱と生活不安定の時代で科研がこれからどういかわからない時期でしたが、所内の色々な立場の人や偉い先生方と色々な議論をし、とにかく何も無くて研究そのものはできなかったけれども、どうしたらいいかという意味で活気に満ちたいい時代であったと思います。研究所の中の組合というものは、立場は色々異なっている、研究

仲間としての連帯という共通のものを貫く雰囲気

吉永氏

理研にいた間仕事を夢中でやり、自由にでき、あっちでもこっちでも戸をたゝきコンタクトできたことは、辞めて10年企業をやっているでも非常に役に立っています。社会では理研という名前は生きていないが、「居た」という誇りを持っています。若い時腕を磨いたということは良いことでした。理研という名を、自分ではあまり出さないが、長く交際して、「あゝ理研に居たのか、それなら腕も口も達者でしょう」と云われた方がいい。若い人に望みたいのは、一生懸命やるということ、研究室を渡り歩いてでも先生方を利用し、生きさしてもらうことです。今日の会は来やすい状態で、かた苦しくなくて……。なつかしい人にあえて胸がひしめくような気持です。

渡辺氏

建物が立派になると、心に緩みができ仕事がおろそかになるとよく云われますが、苦しい時には案外一生懸命やるもので、いい仕事も出るものです。色々問題はあるのでしょうか、今ここへ来る途中にビラが貼ってあるし、そんな事に熱中していて、果して仕事が出来ているかどうか心配です。

田中氏

理研の移転に際し、理研はどうあるべきかと、みんな一生懸命勉強したし、この建物についてどうあるべきか考えました。今私は、

理研が日本の中で一番いい研究所の一つではないかと思っています。中味も建物も。理研が駄目になっても建物だけを生かしておけば大丈夫だ。

外村シヅ氏（鋳造研究室）

たいへん楽しかった。いい会でした。誰か来年の予約をしていましたよ。高令の方もおられますが、来年も元気で出て来られることを願っています。

朝永振一郎氏（仁科研究室）

この雰囲気はいいですね。これなら会長になってもなりかがあります。この理研には3回ぐらい来ています。長岡さんに土地を捜した苦心談も聞いています。でも僕にとっては、昔の理研ですね…。

京大を卒業するとき、仁科先生に誘われて、わたくしが逡巡したとき、仁科先生は「ために来てみなさい。2カ月でも3カ月でも、やってみなさい。」と言われました。当時の理研は、非常に程度が高く、東大よりももっと優れていましたので、僕の力に重すぎるようならば、帰って来ようと思いました。「いきなり結婚するよりは、少し交際してみろ。」と、そういう先生のお気持だったんでしょうね。まあ現在の理研については、先程黒田先生が言ったように、これは年寄りのクセなのだが、年寄りというものは、自分の若いときは良かったと言います。しかし、昔どおりのものをいま作ろうと思っても無理ではないでしょうか。理研のいまの方々が、いろいろ自

分で苦勞を重ねて、築きあげてください。

並木満夫氏（放射線生物研究室）

昔の理研では人間交流がありました。苦しい時代だったせいかもしれません。私はこのOB会がOBと現職員と一緒にした人間達の交流の場であってほしいと思います。今の若い人と、学問やものの考え方の良し悪しについて語りあいたい。今の理研に望むことは、研究屋や技術屋がその所属にしばられずに一つに繋がらなくては……それには、専門にこだわらず自分自身に謙虚で、もっと他に対し受け入れ発展しなければならない。昔の理研は良かった」なんてのはどうでもいい。勝手に云わせておけばいい。問題は、今の若い人が研究室の壁をどうやって破って、大学には無い新しい学問を生んでいくかです。そうでなければ理研の価値が無いですよ。今の人達がどれだけやっているか…。とにかく人の力を利用し合うことです。

鳩山道夫氏（西川研究室）

（OB会を）いままで作らなかったのは怠慢ですよ。なんにもしないでたゞ人を集めればいいですよ。そうすれば自然にわいてくるのですから。

不明氏

とても楽しいので、是非今後も続けてもらいたい。私1960年の安保の時組合の委員長で藤井さんは総務部長でした。口はばったいが、互いに研究所を良くしようという気持があって、こすから取り引きはしなかった

ですよ。今の理研については、設備がよくなったようだから、個人的ベースで仕事をされた方がいい。プロジェクト研究をやる所も日本にあるべきだが、個人の能力とかオリジナリティーを尊び信用する研究所が、日本に一つか二つはなくてはならないと思います。理研がそれだと思う。理研はスターがいい意味でも悪い意味でも多く居るところだと思う。研究者の一人一人がピカッピカッと光るような。あまり振り廻されて金魚のふんみたいにくっついて、下手なサッカーみたいに重心の移動する研究所は魅力が無い。主任というのは、芸者屋のおかみみたいなもので、座って茶を飲んで、芸者（研究者）を売れっこにするように育てるのが本当で、ケチをついたり、足を引っぱってはいけませんよね。

小林駿介氏（マイクロ波物理研究室）

OB会を早くやって欲しいと思っていました。文化的に価値のある研究上の話しをやってもらえば…。過去の蓄積をふまえるように。定期的に講演をしてもらって…。すぐ効果の出るものではないですが、高いオリジナリティーとか文明は過去の蓄積から成っていることを忘れてはいけません。外国でも十何代という学問をやって来て始めてオリジナルなものが出て来るわけですから。理研の中に博物館を作ることを提案します。インストルメントとか過去の記念的なペーパーとか、ロビーにわかるように。昔の理研は良かったということを知ることにも価値があるわけです。理研には



そういう蓄積があるのです。

玉木英彦氏（仁科研究室）

わたくしは、終戦を広島で迎えました。村地さんに原爆調査に連れていかれたんです。終戦で、今後どうすべきかを考えました。もう物理なんか、やめようとも思ったり、また学者としてインターナショナルに生き、日本というものを忘れたいとも思いました。

現在の理研について、現状がよくわからないが、なるべく官僚的にならないようにやって欲しい。みんなの力で……。いまだったら、政治的なことで左に行きすぎて、活動が沈滞するという心配はないと思います。しかし、官僚的になってしまうと活動が停滞することがあるんですよ。大河内先生は、それをしないように注意されました。

浅野弥兵衛氏（大河内研究室）

昭和6年、日本経済はどん底でした。大河内先生は、「ケチな金を政府からもらっても、ロクな研究はできない。この時代だから、研究を事業化して、その利益でもって研究に臨

む。」と言われ、新興コンツェルンにして、事業の利益を研究にまわしていました。それはいわゆる古き良き時代だったんですね。OB会では、今后いろいろな人に出て、話をしたいと思っています。

佐々木秋生氏（科研）

辞めたのが、昭和33年でした。その前7・8年、科研の一番難しい時で、給料がいつくるかわからなかった。ときどき、2千円とか3千円とかくるんですよ。それが何月分のものかわからないんです。しかし、何だかんだと言っても、やはり当時はみんなよく頑張りました。由緒ある理研を滅ぼしてはいけないと、真剣に頑張ったと思います。歴史と伝統をもった理研を、何とか次の世代に継がなければいけないと思いました。いわゆる理研マンというか、当時は純粋な人が多かった。いまの理研は恵まれているが、はたしてそれが研究成果に結びつくかどうか。苦しい時代によい研究成果を出したのにくらべれば、いまはもうすこし成果を出さなくてはいいのではないのでしょうか。

五十嵐弘安氏（総務部）

わたくしが、営業課長時代、山崎研の成果がビキニ水爆で飛ぶように売れました。いま販売部門がないが、あってもいいし、またそんなことにこだわらなくてもいいと思います。理研は基礎研究をやってもらいたい。これは、世代の違いがあり、理由もいろいろあると思いますが、安易に赤旗をあまり振らずに、勉

強して欲しい。

堀井公藤治氏（総務部）

理研OB会が、こうしてできて、4年半ぶりで何って、非常に予期しない人々に会え、また現職の人ぐるみで、いろいろ話し合えるのが、理研を離れたものとしては、非常に嬉しく思います。OBだけでなく、現職の方々に、こうしてご協力いただけるということが嬉しく、またOB会だけでそれほど意味があるとは思えません。現職と一緒に始めてはじめて、意義があるのだと思います。

賀田恒夫氏（微生物研究室）

理研のいいところは、広い分野があり、日本のトップが沢山いて、いろいろな話が聞けるところにある。理研には、総合的なサイエンスの歴史と伝統が残っているし、そういう重さをどんどん伝えていくことがサイエンスのために必要なんではないでしょうか。また、OBだけではなく、現役をも含めた方がよい。

黒田先生が、赤旗を大分気にされておられましたけれど、それはやはり相互に理解をしておられない面があるし、やはり一方的に言ってもいけないと思います。

川崎栄一氏（仁科研究室）

18号館の屋上に住んでいました。（「屋上の仙人」というニックネームがあったようです。横からある現役氏が、注釈。）現在の理研は隔世の感がありますね。中味もだんだん昔の理研に戻りつつあるようですね。しかし世の中は世の中ですから、思想的な対立が激

しいようですね。何か誓いて、聴こえてくるようです。

仁科科研のパーティーのとき、朝永さんに、「君は理研に来たんだから、まず第一に学ばなければならないことは、酒を飲むことだ。」と言われ、後にも先にも、飲みすぎて吐いたのはその時だけでした。

OB会は、卒直に言って、続かないのではないですか。集まっても、知っている人しか話をしない。だから、知らない人に近づけるような企画をして欲しい。講演会とか、昔話のよいところを30分ぐらい話をしてもらうとか…。また、現職との交流は、共通のものがないと無理ですよ。無理をしない方がよいでしょう。

横山すみ氏（仁科研究室）

昔は、よかったですね。仁科先生個人が偉かったこともありますけれども。しょっちゅう先生は、みなさんの中に入っていかれ、何かお父さまのように…。昔は、やはり上から下まで本当によく通じていました。上は、朝永先生から、下はお掃除をされる方に至るまで…。いまの理研は、本当にどこかオカシイですね、役員も労組も…。それが、悲しいですね。

藤井久男氏（理事）

昔は、先輩と、バイロンとかゲーテ、について共に大いに談じ、気持も通じ、思想も通じました。最近は、断絶とか言って…。ただ断絶を意識し過ぎてはいるけれどね。

さき程、黒田先生が言われたように、理研はあの時代で終わったのかも知れないけれど、しかし、そういう考えをもった人と大いに語ることが出来る機会をもつのはいいと思います。朝永先生が言われたように、理研というところを、本当の意味で自由に研究するところであることを、みんなが理解し、伝承していつまでも残していきたいと思います。

いちばん大事なことを自由な精神で、やる。それは、まあ、いろいろ特殊法人とか何とかあります。住木先生、坂口先生は、それを維

持しようとしてきました。いまやそういうものがあるかどうか分からないけれども…。

自由な研究を生かしてもらいたい。

本当に、自由な独創的研究というものを、研究者は理解して、腹に入れていかなければいけない。理研は、個々の研究者を育てていく所ではなくてはいけない。

この会は、結果として、非常によかったと思います。

インタビュアー

関、岡崎
安福、大沢



— 在 職 者 — 座 談 会 —

「OB会について」

2月12日 役員会議室にて

去る2月12日夕刻より理研内で上記の方々にお集まりいただき、OB会について現役がどの様に思っているか、3時間余り話し会っていただきました。以下に当日出た意見の流れを収録いたしました。なお発言者名はふせさせていただきます。

司会—お忙がしいところお集りいただき有難うございます。先日OB会が発足いたしました。御出席の皆様かとても喜んでおられました。OB会を今後との様に発展させてゆくことが大切なことで、現役の皆様にも色々御意見をいただいて、その一助になれば

出席者：阿久津、宇田、上坪、
(50音順) 葛原、竹松、中根、西、
西本、山口、山崎

司会：安福、岡崎、長田

と思っております。OB会の趣旨の一つに「理研の発展をはかる」ということも掲げられているようですし、OB会が育って理研自体の事業にも貢献できるということも夢の一つであるわけです。人の面でも研究の面でも。そういうわけで現役としてOB会をどう思うか、期待でも批判でもざっくばらんにお話ししたいかと思います。先ずこの間のOB会の感想から御願い致します。

A—非常に多勢の方がおられて圧倒されました。あんなにお老寄の偉い先生方が多いの

で、理研の歴史の重さを感じました。

B—私自身、理研にはまだ新しいこともあって、特に関心はありませんでしたが、あんなに多くの人達が私達のバック グランドにおられると知ると力強い気もちょっとします。

C—理研は学校と違って、OBといってもおのおの卒業とか中退とか事情は異なるわけですが、出席された人達が皆理研を懐しがっておられる様子に、ちょっと考えさせられました。

D—懇親会に出席しなかったのですが、OBの性格を分けてみると①めでたく卒業された人、途中で辞められた人、これはまた②発展的に仕事をやっているグループと③うまいけばこれから発展が期待されるグループに分けられると思います。OB会と理研との関係を考えると、この三つのグループと現役がどのようにコンタクト出来るかということになります。要するに理研に居る人と、過去に居た人とが、理研を中心としてより良くなる会であれば望ましい。②のグループと現役との関係では、おたがいに得をし合うということが予想されます。①のグループの方々はそれぞれすでに業績をあげられたわけで、その経験などを学びとることが一つだと思います。③のグループには、むしろに期待するだけでなく、何かこちらからも奉仕することが出来るでしょう。それは①のグループにも言えますが。

E—OB会には人並以上の関心がありました。

この間の懇親会で一番印象に残ったのは、黒田先生の演説で「理研が理研らしかったのは大河内先生の時代までだった」と言われたことでした。先生の言葉を積極的に評価しなければならないと思います。昔の理研は自由に金が使えという面がありました。OB会というものが出来て、理研は裏と表の二重構造をもつことができるようになったと思っています。

F—無関心の典型ですが、OB会が出来て何らかの利益があるだろうとか…。そういう利益がかかわってくるような会は、体質的に好まなくて、こちらから期待することではありません。ただOBから「怠けているのではないか」と時々お叱りを受けるのはいいことでしょうが。

G—「昔の理研は、日本唯一の研究所で、偉い先生を集めたし、自由に金を使えたから優秀であった。」という言い方は正しいかもしれないが、理研を過去から見て、あの時は良かったというのではなくて、その当時の日本でそういう研究方針をあみ出して推進していったことは、非常に冒険であったと思うんです。そういうことをやらざるを得なかったし、自信をもってやれたということは、今の様な全然状況の違った中でも我々はいつも考えなければいけないと思います。我々は「与えられた条件の中でどうやって条件を伸ばしてゆくか」を考える

面において、昔の理研の考え方はやはりユニークであったと評価をします。我々はソリューションを捜さなければいけない。そういうふうに考えたほうが良いでしょう。我々はそういう安易でない道を少しでもとろうとしているかという点が問題ではないでしょうか。昔の人々から学ぶとは何か？ 一体伝統とは何なのかを考えます。我々がある困難な立場に立った時、どの様に対処するかということで、我々と昔を比較してもらわなければいけないのではないのでしょうか。OB会は、そういう事を考える上で非常に役に立つと思います。

E—言葉が足りなかったが、私は黒田先生や大河内先生の居た時代を直接評価したのではなくて、特殊法人という制限を考えると、財団法人の良さがあるということを言いたかったのです。

H—遅れてきて済みません。皆さんの御意見をほとんど聞いていませんが、工作にもOB会というものがありまして、そこでは昔話とか、色々近況とか、理研の将来はどうあるべきとか話しか出る様です。在職している人達同志で、フランクにいろんな話しをする会が少ないんですね。いろんなことを話して、その中からいろんな意味が出てくる会がOB会であつたらいいと思います。

G—工作に限らず人の繋がりがいろんな意味で重要であるということでは、OB会も同

様だと思います。しかし理研の研究活動を上げ、理研の近い将来を考える場合、OBとの繋がりが必要であるということを認識している現役は非常に少ないと思います。そんな意味で、いつも思うのですが「理研」の栄ある名前を背負っているだけで非常に重苦しくて、その上OB会が出来たら全く…(笑)、との気持ちがしないでもない。頭の上から昔のことを言われたりすると、事実よく言われるんですが、OB会への無関心や反発とかがとたんに出てくるんです。司会—一応皆さんにひとまわり発言していただきまして、いろんな問題も出てきましたので後は御自由に話しを進めて下さい。

A—要するに戦前は日本で最高で、大学の教授クラスの人が研究者だった。その後日本の社会や世界も変わっています。今の時代を戦前と比較するのは、ちょっと無理でしょう。戦前はともかくずばぬけた研究所だった。戦後は科学そのものが非常に広がりを見せたし、進歩もしました。戦争に敗けて、その余波をもろに受けたですね。

C—比較するバックグラウンドが全然違うんですね。昔は理研が日本の研究所の唯一のものだったといっているくらいで、戦後は科学が進歩しその中で理研とはどうあるべきだというふうな事を問題にしたとき、昔の夢でなく現代にどうあるべきかを、皆で体現してゆく様に協力する方向が必要ですね。

G—いまの話しの様に、過去の栄光とかいうものに対しては反発が強いのですが、実は、そうは言いながら一定の効用については、よく自分なりにとらえています。というのは、実は理研の広い分野の人とつき合っていて、我々の考え方が閉鎖しがちな点に気付いて、ハッとすることがあります。同じことが、縦の繋がりとしてあるのではないのでしょうか。それがOBと現役にも言えるのではないのでしょうか。それは決して今の研究に役に立つというものではないと思います。もう少し漠然としたもので、OB会がむしろ我々にとって、もう一つの重い傘だとは思わないでむしろフランクにいろんな方と話しあってみて、その中で考え方や苦労話を聞くという効用があるのではないのでしょうか。つまりOB会とは、人々との交流で、いわゆる人脈を扱う機関なんですよ。それ以外の形で利益を計るいわゆる金脈を扱う機関ではないですよ。そういうふうに、我々は考えたいですね。

司会—先程のEさんのOB会イコール裏の理研論はどうなりますか？

E—私は、特殊法人の形態つまり国家予算では、理研自身が自由に金を使えないし、また人の問題でも定員の実質減の強制だから、その形態から脱出するには国家資金のみに頼っていては駄目だと思います。かといって、全部民間資金だけでも駄目ですがね。だから特殊法人においては、外へそういう

資金を作るんですよ。誰にも制約されない資金をもって、理事や研究者がこう考えると思えば、すぐに思いきり金を使えるということが必要だし、人でも定員外で大学院生とか留学生を招聘してゆくことが必要ですね。そしてOBが人的な面でも経済的な面でも協力してくれることが必要ですね。そして日本全国に広がった理研、世界に広がった理研というものを考えたいですね。OB会は、懇親という面もあるし、もう一つ事業的感觉からみて、OB会を含めた広がった理研という超大シンクタンクを考えるとですよ。とにかく何かしなければ、理研はジリ貧ですよ。

司会—OB会があってもなくてもOBの協力が理研にとって必要であるということだと思います。先日の懇親会のインタビューでも出ていましたが、OBの方々もいろいろ理研に寄与したい、期待したいと思ってもらえるようです。「懇親会で飲んで終わるだけではつまらない」とも言われました。さらに理研の文化的財産として、講演会とか研究博物館などを理研の事業としてやってもらいたいという希望も、OBの中にありました。

G—あの頃のものは、理研の中にこそ残ってしかるべきなんですよ。昔の人達がどんなに苦労をしたかなど、自然科学史が少しでも残っていたらそのままにして置くのはもったいないですね。バイオニアの人達

がどのような困難を、いかに克服していったかという事実や、どのような装置を使っていたかを残したい。ただそんなことをしていて、OB会そのものが博物館になってしまっではつまらない…（笑）

A—我々の自然科学の仕事は、ロマンシズムみたいなものが必ず必要で、そういうものの一つに、昔の大先生を心の奥にもっているということが必要だ。しかし事あるごとに表に出て来て、プレッシャーグループになれば、それはマイナスの面になるだろう。

司会—話しはすこし変わりますが、理研が駒込から大和へ移ったことによる断絶感が、OBの間にある様ですが、これはなんとかして我々の方から解決をしてゆく他はないと思います。移ったことによるもう一つの断絶が、理研と地元にあると思うのです。最近のある新聞の全国市町村の特集に、和光市の紹介で「理化学研究所は日本のトップ水準だが、市民になじみが薄い」と出ていました。私達は、地域に受け入れられることが第一歩だと思います。OBの方々に頼んで、公民館で講演会をやるとかして地域に親しまれてゆくことも、結局理研のプラスになると思うし、OBの方々もここに繋がりが出来てくことになると思うのです。

E—それは大切なことです。サイクロトロンやプラズマ実験棟の建設時において、地元の人達になっ得してもらうために、大先生

が何日もかかって説明しました。そういう講演会をやるということは、良いアイデアだ。そんな具体的な事が大切なのです。OB会だけでなく理研として、どういう方向で行くかという構想があって、それに対してOB会がどういう対応をしていったらいいだろうかということではなければならないでしょう。

C—そういうことならば、沢山あります。ただOB側の姿勢などもわからないので提案しないんですよ。クラブを作るとか、講堂を作るだとか…そういうことが出来るでしょうか。理研の姿勢が決まらないからでしょう。

H—事業とか目的とか規約とかあまりとり決めたら、なかなか発言しにくくなりますけれど、名簿とか会報を、毎年出し続け飲んだりしているうちに、身近かなものから大きなものが出てくれば、それで頼もしいと思います。

D—私は、日本という国が「寄附をしようとしてもさせてくれない国」だと思います。例えば、図書館を作るときなどに、欧米では〇〇メモリアルの形で作る。それは寄附なんですね。寄附をどうして受け付けないんだろうという質問をされたことがあります。例えば、Eさんの言われた様に、OB会が財団として繋がるなら、可能になるだろうか？

E—OB会を作った。さあ金を集めてくれ、

ということを考えているのではないんですよ。何かを始めようと話し始めて、予算タイミングを失うことがあるんですよ。金を使うのに、特定の研究だけでなく緊急性のある研究だとか、あるいは特許獲得のために使うという自由があっていいのではないのでしょうか。それにはやはり理研が自分で予算以上にかせいで金しかないわけですが、理研の発展から考えてゆくと、財団の様なものがあるのもいいのじゃあないかと思うのです。そうすれば、大河内先生の時の様な良さが、特殊法人と結びつくのではないのでしょうか。全部財団というのと、とてもそれほど金の集まる情勢ではありませんからね。もっと基本的に考えると、理研は特殊法人でなくても国立機関でもいいわけですね。たとえば、大学連合の附属研究所の様なものにでもなれば、人の交流ももっと自由になりますので望ましいと思うが、やっぱり予算に縛られますね。「金はもらう。口は出すな」といえるだけの実力がなければいけないわけです。さらに財団の良さに、特殊法人の財政的な堅実さを加えて、堅実さ+自由さという様なものを考えたかどうか。それに、理研というのは、日本で唯一の人脈を持っているんですよ。その人脈を活用させてもらえば良いということなんで、OBというものをあまり対象に置かずに、OBを含めた理研というものを考えたとき、そこで何が出来るかを考

えてゆけば、それほどとっぴな考え方でもないですよ。

司会—BさんやFさんは、OB会というものに反対ではないが、利益的である必要はないという意見であったし、Hさんからは互いになにかを得れば良いという意見が出たんですが、Eさんの発言は爆弾的発言ですね。

D—意見は楽しいが、いかにして理研のアクティビティーを高めるか、その一助としてのOB会ということならね。

C—財団が出来、奨励研究費みたいなものが出来るといいですよ。

F—賛成だが、それはOB会ではない。事務局みたいなものが、OB会にそのうち出来てしまう。そこで事務局が権力を持って、コントロールするようになる。そういうことになりはしないかと考えて、僕はEさんの意見は嫌いなんです。

E—東海道53次を歩いて行く人と、鉄道で行く人がいて、私は鉄道を作ることを考えています。

G—賛成だが、それが出来るまで待つつもりはありません。今言われたことは、我々が我々に与えられた環境の中で、何も出来ないかという必ずしもそうではないんですよ。我々がまず最初にする努力というのは、理事長、理事に御願いし、それで駄目ならばOB会の方に話して、なんとか道を開いてゆくという様に働きかけてゆくことが重

要です。

C-O B会は、理研の発展に寄与するというとき、必ずしも具体的な形を通して、発展、貢献するというのではなく、もっと心情的精神的なことで解釈しているんです。

B-O B会に対して、何を望むかではなく、自然発生的にお互いの利益になることが起こって来れば良いのではないのでしょうか。皆で集まって、ワイワイやっている内に何か利益を得ることがあればよいと思います。こちらから、金集めに関わるのは賛成しない。

G-もうすこし金があれば、こんなことが出来るのだが…とよく言っているが、理研の中で、「やれば出来ること」と「やって出来ないこと」の区別が、我々に曖昧だと思う。たいていのことはやって出来ないことはないと思います。

司会-O B会の問題と理研内部の問題が交錯しましたが、O B会のどこに期待するかについて、改めて、どうぞ。

C-昔の様に理研全体で地域の人々にも集まってもらって、一般向きのシンポジウムを開き、その後の懇親会をO B会の懇親会と兼ねてやるという方法は良いと思います。

A-O Bと話して思ったのだが、理研に一貫して流れているのは「自由奔放さ」ではないでしょうか。

司会-最後に、O B会と理研がやってはいけないことについて、御意見をどうぞ。

I-O Bの方々の中にいろいろ思惑があると思いますが、利を狙う団体にはしたくありません。例えば選挙の母体とかにはしてはいけません。

E-何にしろ一方向的に利用するということは、いけないな。

C-会員としての良識に期待するだけですかね。

G-O Bと現役でお互いに、いろんな意味で、政治的な事に関して、組織的発言をしないことが大切ではないか。例えば、現在の理研の組合活動について、O Bが「理研らしくない。絶対やめるべきだ。」という意見や、逆に、現役がO Bに対して、この様な事について、バックアップしてくれと組織的に持ち込むことなどはしない方が良いでしょう。あれは、現役にとってプライベートなことなものですから。

D-お互いに、子供にならないことですね。朝永先生の言われたオールドベイベーとは、社会的な意味でのベイベーですから、相手に対する批判も自分の基準を相手に押しつけない様にしたいものですね。

G-言葉をかえると、我々がやっていることに批判を受けるのはかまわないでしょう。むしろ外から批判をどんどんやってもらいたい。ただその仕方が問題であって、事情を知った上で批判をしてもらいたいものです。

E-O Bには、何でも言ってもらえばよいで

しょう。老人にはタブーなんて無意味だから、お互いに余り拘束しない方が良いでしょう。司会インタビューでのOBの声にも、「我々は、昔の夢は押しつけない。若い人に接

したいんだ。」というものもあり、お互いに批判をしあうという意味にもとれますし、この点で、現役とOBの声とは、周波数が合っている様に思います。本日は、お忙しい所を、有難うございました。

便り



OBのみなさまからいただいた返信葉書の「近況の御便り欄」から、いくつかを拾い出しました。

沢 晶 恭

理研のスピリットを地方の若者にたくき込むべく努めておりますが、効率は高くありません。

中 村 弘

旧理研のことを思う時、それは戦争です。どうぞ、人と人とか争わず、国と国が戦わず。皆様の上に平安がありますように。

中 西 環



いみじくも六十路の坂は越えしかど
いまに至らぬ人の道かな(66才)
身につけしわざもちからも老いぬれば
くらしの道に迷いもぞする



林 太 郎

図書室の利用の便宜を一般に与えられるのはよいと思います。あのロビーの利用もよいと思います。

住 木 諭 介

老害をばらまかないために図書館の一室を借りて抗生物質補填の執筆に専念しております。昨年10月に胃を切り取ってから人世観を変え、見ざる、言わざる、聞かざるの態を取っております。

事務局より

理研OB会第1回総会および懇親会報告

昭和49年11月16日午後2時より、和光市の理化学研究所において約170名のOB各位の出席のもとに第1回総会および懇親会が開催され、理研OB会が発足しました。

この日定刻の約1時間前より三々五々と理研を訪ねられたOB・OG各位は旧交を暖めつつ総会場の椅子を埋められ、設立準備世話人の天野鉄次氏、佐田登志夫氏両司会のもとに第1回総会が開催されました。総会は設立準備世話人代表宮崎友喜雄氏の「設立の経過」より始まり、「規約の説明」、「会長推挙」、「会長挨拶」、「副会長推挙」、「OB会の運営について」の順に進められました。いづれの議題も出席者全員の盛大な拍手によって規約および下記の会長以下各役員の就任が承認され、OB会は盛会裡に第一步を踏み出しました。

会 長	朝 永 振 一 郎		
副 会 長	宮 崎 友 喜 雄		
幹 事	天 野 鉄 次	石 禾 和 夫	
	大 高 洋 一	鎌 田 甲 一	
	小 林 久 信	佐 田 登 志 夫	
	滝 幸	外 村 シ ズ	
	並 木 満 夫		
会 計 監 査	堀 井 公 藤 治	渡 辺 清	

なお、この席上昭和49年度会費は1,000円と決定しました。続いて開かれた懇親会には理研在職者約70名も加わり、朝永振一郎会長の乾杯、星野敏雄理研理事長の挨拶、佐藤正典元科研社長、坂口謹一郎元副理事長および黒田正夫元主任研究員の祝辞があり、つぎに物故者に対する黙禱後、懇親に入り和気あいあいの内に午後5時散会した。理研の大先輩である飯高一郎、赤平武雄両元主任研究員のお元気を始め、地方からも多くの先輩諸氏が速路和光市までお出で下され感謝している次第です。

下記の理研在職者の方々にOB会を補佐して頂くことになりました。

明 石 健 次 郎 (厚 生 課)	阿 久 津 寿 一 (放 射 線 研)
安 藤 忠 彦 (微 生 物 学 研)	岡 沢 精 茂 (放 射 線 生 物 学 研)
岡 本 祥 一 (磁 性 研)	小 山 政 史 (工 作 部)
田 原 昭 (有 機 化 成 研)	長 田 富 男 (開 発 調 査 室)

中 根 平 之 助（高分子物理研） 松 井 正 夫（放射線化学研）

追記、すでに御存知の様に田原昭氏は昭和50年1月2日に急逝されました。謹んで哀悼の意を表します。なお、後任に、江本栄氏をお願いいたしました。

◎50年度年会費納入と寄附金のお願い

50年度年会費納入の時期がまいりました。お手数をおかけしますが、年会費1,000円をご納入下さるようお願いいたします。

なお、今年度より寄附金1口1,000円（1口以上何口でも結構です。）の制度を設けました。よろしく御協力の程をお願いいたします。

◎OB会入会のお奨め

未だ入会されていない方は、この機会にぜひご入会下さるようお願いいたします。

◎理化学研究所出身者名簿のお知らせ

皆さんのご協力により理研出身者名簿が出来上りましたので、会員の皆様にご送附致しました。未着の方は事務局までご連絡下さい。

名簿作成に当っては、会員からの連絡および手にはいった資料から出来るかぎりの手段により情報集めを致しましたが、それでもなお手落ちがあることゝ思います。

お気付の点がありましたらお知らせ下さい。今後名簿は3年毎に作成し、その間年1回修正表を作る予定です。

郵便番号、住所、電話番号、勤務先等のご変更あるいは誤記などがございましたら事務局までご一報下さるようお願いいたします。



田 原	昭 氏	主 任 研 究 員	死 亡
藤 井	久 男 氏	理 事	退 任
仲 谷	泰 吉 氏	"	"
楠 田	脩 一 氏	"	就 任
朝 野	武 彦 氏	監 事	"

一 編 集 後 記



◎ OB会々報第1号をお送り申し上げます。

創刊号でもあり、事務局の不慣れのため皆様のご期待にそえなかった部分が多かったのではないかと考えております。

今後年2回発行する予定ですが、皆様のご意見、ご批判をどしどしいたゞいて編集の参考にし、大いに充実した有効なものに育てて行きたいと考えております。

◎ 投稿のお願い

OB会々報は会員皆さんの交流、理研および所員との意志疎通のためのコミュニケーションの場でもあります。

皆様のご意見、ご要望または、情報、連絡、通信、その他どしどしご投稿下さい。



理化学研究所建物配置図

